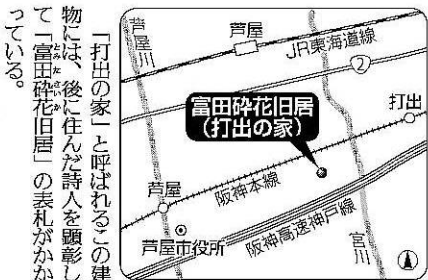


芦屋・打出の家

兵庫県芦屋市宮川町は、市南部を東西に走る阪神電鉄と、阪神高速神戸線に挟まれた一角にある。町内の保育所から聞こえてくる子どもたちの笑い声にはほろが緩む。洋風の戸建て住宅が並ぶ街角にやや唐突に白塀の日本家屋が現れた。



「打出の家」と呼ばれるこの建物には、後に住んだ詩人を顕彰して「富田碎花旧居」の表札がかかっている。

「実は、当ても『谷崎』とは違う表札がかかっていたんですよ。門をくぐり、当時のままという庭の飛び石の踏み心地を確かめていると、旧居管理人の琴浦清司さん(65)が教えてくれた。

なる松子と同居を始めた。当時はともに、妻、夫がいる、「W不倫」。人目を忍んで移り住み、松子の旧姓「森田」の表札を掲げていた。「谷崎のはずやのに森田。大人の事情の分からん子どもも心に不思議でしたね。現在、旧居の隣に住み、碎花の甥にあたる田島滋さん(84)は、小学生だった当時を覚えていない。『谷崎さんの家は物音一つしない奇妙な家でした』と、谷崎が世間の目をはばかった様子を振り返る。東京の文壇で華々しく活躍する谷崎からは想像しがたい。「このころ谷崎は離婚を巡るスキャンダルで傷つき、経済的にも最も苦しかった」と芦屋市谷崎潤一郎記念館の井上勝博学芸員(49)は話す。

私家版「細雪」上巻



小説「細雪」の連載は軍部の圧力で中断するが、谷崎はなおも執筆を続ける。終戦前に下巻途中まで書き上げ、上巻は「私家版」として友人・知人に密かに配った。戦禍による原稿の散逸・焼失を恐れてのことであったという。(井上勝博・芦屋市谷崎潤一郎記念館学芸員)

芦屋市谷崎潤一郎記念館(兵庫県芦屋市伊勢町12の15)で6月26日まで開催している春の特別展「四姉妹の昭和一よみがえる『細雪』の世界」で展示

人生・仕事 転機迎える



谷崎と松子が暮らした打出の家(芦屋市宮川町)

メモ 打出の家(芦屋市宮川町4の12)は、敷地面積約330平方メートルで、建築年は不明。谷崎の転居後に、詩人・富田碎花(1890~1984)が暮らした。現在は、碎花の業績を伝える施設として芦屋市が管理している。開館は、年末年始や盆を除く日・水曜午前10時~午後4時(入館は午後3時まで)で、入館無料。阪神打出駅から西へ徒歩約5分。第2次世界大戦の空襲で母屋は焼けたが、谷崎が執筆に使った書斎は難を逃れた。問い合わせは市教委生涯学習課(0797・38・2091)へ。



「打出の家」で祝言を挙げる谷崎と松子(1960年1月撮影、芦屋市谷崎潤一郎記念館提供)

の妹に谷崎が傾倒したことから不仲に。彼女の境遇に同情した友人の詩人佐藤春夫に谷崎は「妻をもらってくれ」と持ちかけ、30年に離婚。「細君譲渡事件」として世間を騒がせた。

その後、雑誌記者だった古川丁子と結婚するが、その頃すでに大阪・船場の老舗問屋の御寮人さんだった松子への思いを募らせていた。夫の道楽を嘆く手紙を松

間に対してさえ感じたことはいない。猫を溺愛する庄造と、当時の谷崎を重ねて、井上孝芸員は対人関係に疲れた谷崎の心情が、リリーを溺愛して人間の女性を愛せない庄造に表れているのでは」と分析する。

しかし、この家で谷崎は転機を迎える。

転居翌年、この家で松子と祝言を挙げて正式に夫婦となる。源氏物語の現代語訳という大仕事に取りかかった。

母屋の縁側に座って庭を眺める。「谷崎源氏」が生まれた離れの書斎に目をやった。まちの喧嘩と切り離された、ゆったりとした時間が流れる。

甲南女子大の細江光名誉教授(51)(日本近代文学)は「心情的にも経済的には落ち着いて、余裕が出た谷崎は松子の子や妹と同居し、愛する女性に囲まれる。これが『細雪』の次女・幸子の家庭のモデルとなった」と指摘する。

打出の家こそが、細雪の原点だ(桜井悠介)